

継衛系 (つぎえけい)

選 抜 者：宮下忠博 牧田 弘

来歴および育成者：田中継衛が自然交雑した種子を播種して育成した実生

特 性

長野県でおにぐるみの優良系統を選抜する目的で、県内で自生する350余の系統から①果仁が完全な形で容易にかく果から取り出せる。②果仁が大きく、果仁歩合が高い。③収量が多く、隔年結果が少ない等の基準で選抜事業を行った。その結果、長野県上伊那郡高遠町河南の田中継衛の圃場に栽植してあった個体を選抜した。その後、昭和62年に長野県の奨励品種となった。

■栽培特性

樹姿はやや開帳性を示し、樹勢は強く、樹冠が大きい。枝梢は、基部が淡灰色で先端部分が淡褐色であり、節間長が長い。新梢の発生は、やや多い。花芽の着性は、1新梢中雌花が0.93個、雄花が15.4個と選抜した系統の中では多い。

1花房中の雌花の数は、13.6～16.9個であり中位である。また、満開期における雌花の花房長は、12.2～13.0cmであり中位である。

開花特性は、雄花先熟型である。雄花は、雌花より8日から10日早く咲く。平年の満開期は、長野県南信農業試験場(標高560m)で、雄花が5月10日、雌花が5月20日である。雄花の開花期間は、7日から10日である。このため結実の安定には、授粉樹として雄花の開花期の遅い品種、系統の導入が必要である。

苗木は、実生苗に接ぎ木をして育成する。若木の生育は旺盛であるが、定植後4年から5年で結実が始まる。結実が始まるに従い樹勢の落ち着きが見られる。

収穫期は9月下旬から10月上旬であり、自然落下を待って拾い集め収穫する。

■果実特性

かく果は、外皮に包まれているため収穫した果実を1ヶ所に集め、土を軽くかぶせるか濡れむしろなどで覆い、外皮を腐らせた後、水洗し調整する。

かく果の色は、淡褐色から淡赤褐色。果面は、比較的滑らかである。果仁の色は、淡褐色ないし黄褐色で充実し、光沢があり美しい。

かく果の大きさは、縦径36.9mm、横径32.7mm、幅径31.3mm、1果重6.4gと中位である。

1果仁重は、1.9gで中位。果仁歩合は、29.7%と調査した350余の系統の中では極めて高い系統である。

果仁の取り出し法は、かく果を一昼夜くらい水浸してから、炒ってかく果が開殻してからナイフでこじ開けて果仁を取り出す。果仁は、香ばしく濃厚な味で品質優良である。

かく果の収穫量は、10a20本植えてで換算し、5年生で2.4kg、8年生97kg、10年生で232kgと豊産性である。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

特に問題となる病害は見られない。害虫の被害は、アメリカシロヒトリの食害が極めて大きく、防除が必要である。また、夜間照明の当たる場所は、アメリカシロヒトリの被害が多くなるので避ける。

栽植土壌は、ほとんどの土壌に適應できるが土壌水分の多い土壌が好まれる。生育が旺盛であるので栽植距離を広めにする。

授粉樹は、「継衛系」の雌花の開花期に雄花が開花するカラスグルミなどを植える。

(牧田 弘)